地　理　歴　史

世界史Ａ，世界史Ｂ

第１　高等学校教科担当教員の意見・評価

世　界　史　Ａ

１　前　　文

本年度の「世界史Ａ」の受験者数は1,408名と，昨年度の1,544名から136名減少したが，科目選択率は昨年度と変わらず0.4％となっている。本試験の平均点は48.1点で，「世界史Ｂ」の平均点65.83点とは17.73点の差があり，大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）時と変わらず，両者の平均点には開きがある。なお，評価に当たっては，14ページに記載の８つの観点により，総合的に検討を行った。

２　内　容・範　囲

（1）　評価の観点

年度・出題数 設問形式	令和４年度 出題数	（　出題率　）
主に知識・技能を評価するもの	24	（　77.4　％　）
主に思考・判断を評価するもの	7	（　22.6　％　）
合　　計	31	（　100.0　％　）

（2）　分野別の出題数・出題率

年度・出題数 分野	令和４年度 出題数	（　出題率　）
政治史	27	（　87.1　％　）
社会経済史	2	（　6.5　％　）
文化史	2	（　6.5　％　）
複数分野に関わる	0	（　0.0　％　）
合　　計	31	（　100.0　％　）

＊知識・技能を評価する問題と思考・判断を評価する問題の分類は、評価・分析委員会の判断による

（3）　時代別の出題数・出題率

年度・出題数 時代	令和４年度 出題数	（　出題率　）
古代史	1	（　3.2　％　）
中世史	3	（　9.7　％　）
近世史	6	（　19.4　％　）
近代史	3	（　9.7　％　）
現代史	16	（　51.6　％　）
［うち戦後史］	8	（　25.8　％　）
複数時代混合	2	（　6.5　％　）
合　　計	31	（　100.0　％　）

（4）　地域別の出題数・出題率

年度・出題数 地域	令和４年度 出題数	（　出題率　）
西欧・北米	11	（　35.5　％　）
東欧・ロシア	5	（　16.1　％　）
東・内陸アジア	11	（　35.5　％　）
南・東南アジア	1	（　3.2　％　）
西アジア・アフリカ	1	（　3.2　％　）
中南米・オセアニア	1	（　3.2　％　）
複数地域に関わる	1	（　3.2　％　）
合　　計	31	（　100.0　％　）

中世（5c～14c）・近世（15c～17c）・近代（18c～19c）・現代（20c～）を判断の目安とする。

第１問　図像から見る世界の歴史

問１　風刺画を読みとり，解説文中の空欄に適語を選択する組み合わせ問題。単語ではなく，ごく短い連語を選択させる工夫を入れた。連合国の反抗がアフリカから始まったことを資料から読みとらせる設問にすれば，思考力を問うものとなっただろう。

問２　風刺画を読みとり，その意味するところを考察して適する文章を選択させる問題。実質的に①と②の二択で答えが出てしまうため，易問となってしまったが，選択肢にできるだけ固有名詞を出さないよう工夫したため，抽象的な理解を問うことに成功した。

問３　日英同盟の背景を,「時局図」という風刺画から読みとらせようとした問題。空欄に入れる言葉は文章であり,「1903年」という年代から考える知識と,「ジョン＝ブル」「熊」が意味するところを思考することから正解に導く思考力等を問う設問である。

問４　ジョン=ヘイの門戸開放宣言を，風刺画・対話文・年代から答えさせる四択問題。歴史の因果関係や前後関係など包括的な知識を理解する力が求められている。

問５　解説文の読み取りをもとに，清末の政治状況を考察させる問題。風刺画と「先生」の解説文を対照しながら選択肢を吟味する必要があり，政治体制や変革などに関する概念的な知識の理解を問うことができる良問。

問６　ヴィルヘルム２世の政策について，正しい文を選択する問題。知識を問うものであるが，追加の資料を提示して考えさせれば，思考力を問うこともできただろう。

問７　ドイツ皇帝が寓意画を構想した意図を推測させる組み合わせ問題。リード文からフランスであることを読み取る知識問題に，意図を推測させる思考力を問う設問を組み合わせており，良問と言える。

問８　アジアの民族運動について正しい文を選ぶ問題。単純な知識問題であるが,「黄禍論の対象と考えうる歴史的事象はどれか」などとすれば思考力を問う良問になった可能性がある。

第２問　大航海時代及びローマ法の授業関連史

問１　ヴァスコ=ダ=ガマとその狙いを判断する組み合わせ問題。会話文に読みとりの答えがすべて書かれていた。資料文の読み取りを中心としていれば，知識理解を土台として判断力を問う良問になった可能性がある。

問２　ポルトガルの活動と香辛料について誤文を選ぶ問題。④の判定について，知識だけでなく，資料や会話文から答えを導き出せるような工夫が求められる。

問３　ユスティニアヌス大帝と『ローマ法大全』に関する組み合わせ問題。ユスティニアヌスという基本的な知識と，会話文から読みとれる事柄を問うた。ヨーロッパの大学の位置を示す地図の読み取りを加えるなどの工夫が求められる。

問４　「ローマ法の研究や教育」に下線を引き，それに関連する「ヨーロッパの学問や文化」の正文を選ぶ問題。ただ単純な知識だけを問うもので，写真を出すなど工夫が欲しい。

問５　「商業活動」に下線を引き，それについての二文正誤組み合わせ問題。会話文との関係を深め，資料の読み取りを加えた出題にすれば，思考力を問う設問になる可能性があっただろう。

第３問　世界史上の帝国

問１　南京の位置を地図中から選ぶ問題。資料から南京であることを読みとり，地図中で特定しなくてはいけないのだが,「江南」という用語を使っているため知識問題となってしまったのが残念。「江南」も空欄にすれば，資料を読みとる思考力を問うことができたのではないか。

問２　「当時の王朝」を滅ぼした李自成の乱を選ばせる問題。リード文で黄宗義が「明の末期から清の初期を生きた文人」と明示しているところを読み取り，李自成の乱を導き出す知識問題。

問３　明と清における北京の位置づけの違いを考えさせる六択問題。資料を読み解きながら，明と清で北京の置かれた意味合いの違いについて，知識をもとに考察させる良問。

問４　スキタイの特徴について正文を選ぶ問題。知識を問うものであったが，単語ではなく説明を求めている。スキタイという代表的な遊牧民族の特徴や周辺地域への影響などを読み取る資料があれば，良問となる可能性があっただろう。

問５　十字軍とその発端を選ぶ組み合わせ問題。会話文の「12世紀」という時代設定から判定する知識問題。会話文の「アンナ=コムネナは，人々の共生と対立の風景を描いています」という観点を切り口として作問すると，資料も活かした良問になったと思われる。

第４問　人の移動の歴史

問１　19世紀の交通網の発達についての誤文を選ぶ問題。「19世紀」であるか否かのみを問う知識問題である。

問２　移民の「送り出し国」と「受け入れ国」の人数の推移を示す表を読み取る問題。いずれも表の単純な読みとりで正解できる。仮説として提示された根拠の部分を空欄にして組み合わせ問題にするなどすれば，良問となった可能性がある。

問３　リード文とグラフの読み取りから，大躍進と文化大革命を導き出す組み合わせ問題。年代が分かっているか否かが問われる知識問題だが，「グラフを読み取った次の４つの仮説のうち，合理的に説明できているものはどれか」などとすれば，思考力を問うことができたであろう。

問４　日中戦争における重慶遷都の理解を聞く問題。判断の根拠を年代にせず，勢力地図を読み取らせる方法もあるだろう。また，本拠地の移動の違いを考察させようとする意図は良いので，地図に矢印を入れて選択させるなどしてはどうだろうか。

問５　人の移住に関して誤文を選ばせる問題。選択肢相互に関連がない知識問題。

第５問　民主化の動き関連史

問１　フランコの穴埋めとスペイン政府の態度の組み合わせ問題。知識問題にリード文の読み取りを組み合わせたものであるが，読みとり部分の工夫があれば，歴史的思考を問う設問となった可能性がある。

問２　スペイン内戦時期におけるイタリアの外交政策についての四択問題。知識問題である。

問３　第三勢力についての正文を選ぶ問題。第三勢力というテーマはリード文との関連性が薄い。「過去との向き合い方」などのテーマとすれば，受験者の思考もスムーズであっただろう。

問４　光州事件に関する人物名と学生たちの主張の組合せ問題。朴正熙と金大中との識別や，抗議運動を起こした大学生の声明文の読み解きなどによって判断することができる適切な問題。

問５　世界史上の民主化の動きについて正文を選ばせる四択問題。知識問題である。

問６　「ベルリンの壁崩壊」を年表の中に位置づける年代整序の問題。年表の「イラン=イラク戦争の勃発」を「東西ドイツ基本条約」などとすれば，スターリンの死去，EUの東欧への拡大と関連づけることができて，因果関係から推論できる論理的整合性を問うことができただろう。

問７　ゴルバチョフのペレストロイカを選択させる問題。改革名と指導者の組み合わせに，改革内容の資料の読み取りを加えることができれば，思考力を問う良問となった可能性がある。

問８　会話文中の空欄に単語と文章を入れる問題。文章を選ぶためには冷戦終結前か後かの状況の違いを判断する必要があり，知識理解と因果関係を問う設問であった。

３　分　量・程　度

リード文や資料が多く盛り込まれ，解答に至るまでに資料の読解や思考や判断力を求める問題がいくつか見られた。分量としては，資料や文章量ともに適切であった。

難易度は標準的であり，大学入学希望者の学力を評価する問題として適切と考える。第１問の 2 ・ 3 ・ 5 は読み解きを求める設問であり，特に 5 は良問。 7 は寓意画と解説文から具体的な事例に落とし込んで理解できるか否かを問うた良問。 9 は読み取りを求めるものであるが，リード文よりも資料の読み取り問題になっていればなお良かっただろう。 16 は二つの空欄にそれぞれ短文を入れさせるもので，思考とその思考の基となる知識の六択で，基本的な知識をもとに資料やリード文から総合的に考察させる良問であった。 20 は仮説の内容を考察させるような設問になっていれば，表の読み取りと共に思考力を問う良問になった可能性がある。 24 は文脈を読み取る部分の工夫をすることで，良問になる可能性を持っている。いっぽう， 13 ， 23 ， 26 ， 28

は，リード文や資料との関連性が薄く，各大問における位置づけも弱かった。大問，もしくは中問のテーマに即した出題にすることが課題となるだろう。

4　表　現・形　式

第１問Ａにおいて，資料１の説明と資料２の説明を入れ替える方が，受験者が読み解く順序と整合したと思われる。また，第２問のＢの会話文は十分活用されていたとは言えず，出題に工夫が求められる。第５問で写真が２枚提示されたが，読みとき等の活用ができなかった。来年度以降は，写真そのものの読み解きに挑戦して欲しい。一方で，第１問のＢで出された「時局図」は，会話文を使って説明しながら，受験者の思考をうながす工夫をしていたことが評価できる。単純な単語の穴埋めは減少し，意味内容を示す文章を埋めさせる問題が増えた。全体的に図や絵が４，資料文４，地図１，表・グラフ２，写真２という資料のバランスも良く，読み取りや思考を促すなどおおむね効果的に使われるなど，素材としても適切であり，うまく利用できていたと思われる。来年度以降も，さらにグラフの特質や特性を生かし，変化や推移に着目して，対象となる歴史的事象の役割や意味づけの変容や背景を捉える力を問うことができるよう，積極的にチャレンジして欲しい。またその際，文字資料を用い，グラフなどを提示するなかで対立する意見を示し，より合理的に説明できているものを選ばせるなど，受験者の論理的思考力を問う設問が出題されることが望ましい。

5　ま　　と　　め（総括的な評価）

全体を通して見てみると，随所に様々な工夫がなされ，受験者の思考力等を問うための手立てがなされていたと考えられる。地域ではヨーロッパと中国，分野では政治史を中心としたものになっていたが，世界史Ａという科目の特性上ある程度やむを得ない部分はあるかと考える。ただ，偏りが出てしまうと，翌年の出題についての憶測を生むことにもなりかねず，注意が必要だろう。また，世界史Ａであることから，前近代については，細かな事実的知識の理解を問うよりも，資料から読みとれる情報をもとに，時代の特徴などを捉えることができているかどうかを問う問題となることが望ましい。また，個々の小問が大問ごとのテーマを踏まえたものになっていて，出題が有機的に連関しているとさらに良かったと考える。大テーマには例えば，国民国家，民族，皇帝権，朝貢，ウンマ，封建制，資本主義，社会主義，ロマン主義，儒学，ジェンダー，感染症，地球環境問題などの概念や事項を含むものを設定し，中問やその中の小問はそれら概念や事項に関連したものとして，大問そのものを一つのテーマ史と見立てる作題なども考えられよう。その点，第２問の「世界史の授業について」という大テーマには改善の余地がある。

一方，３や７のように資料の読みとりや会話文からの情報収集をもとに，文脈を考えながら論理的な整合性のとれる文章を選択させる問題，５のように政治や社会に関する概念的な理解ができているかを問う問題，16のように，北京という同じ都市について，王朝が変わることで歴史的な意味づけにも変化が見られることを，資料を読み込むことで読みとらせようとする問題など，受験者の知識をもとにした深い思考を求める良問が見られた。それ以外の設問も，単純な穴埋め問題ではなく，資料や知識を組み合わせることで正解にたどりつく思考に基づくものが多く見られたことは，作題者の努力を感じる点であった。また，知識を問うている問題であっても，そこに何か一つ読みとりを加えることで，受験者の知的好奇心を刺激するような出題に昇華させることは十分可能であると考える。資料の読み取りや活用にもとづく仮説の提示と，それへの検証などを受験者に求める工夫を今後も続けてもらえるよう，強く望む。さらに，29に見られるような年代整序や時間的な前後関係に関連する設問は，物事の因果関係や影響を考察させる良い手段となりうるため，年表に示す項目や，出題形式などについて，今後も作問を工夫して出題して欲しい。

なお，今回の評価・分析委員会では，知識のみ，または情報の読取り，またはその両方のみを必要とする設問を「知識・技能」と分類し，考察，構想，説明・議論する力を問うている設問を「思考・判断・表現」と分類した。最後に，問題作成に当たり，ご尽力いただいた委員の皆さまに感謝申し上げたい。

世　界　史　B

1　前　　文

「世界史Ｂ」の受験者数は82,986名と，昨年度より2,713名減少し，２年続けての減少となっている。科目選択率も１％減の22％となっている。本試験の平均点は65.83点であり，日本史Ｂや地理Ｂと比較するとやや高い数値となっている。

なお，評価に当たっては，14ページに記載の８つの観点により，総合的に検討を行った。

2　内　容・範　囲

（1） 評価の観点

年度・出題数 設問形式	令和４年度 出題数	（　出題率　）
主に知識・技能を評価するもの	29	（ 85.3 ％ ）
主に思考・判断を評価するもの	5	（ 14.7 ％ ）
合　　計	34	（ 100.0 ％ ）

（2） 分野別の出題数・出題率

年度・出題数 分野	令和４年度 出題数	（ 出題率 ）
政治史	23	（ 67.6 ％ ）
社会経済史	5	（ 14.7 ％ ）
文化史	4	（ 11.8 ％ ）
複数分野に関わる	2	（ 5.9 ％ ）
合　　計	34	（ 100.0 ％ ）

＊知識・技能を評価する問題と思考・判断を評価する問題の分類は、評価・分析委員会の判断による

（3） 時代別の出題数・出題率

年度・出題数 時代	令和４年度 出題数	（　出題率　）
古代史	0	（ 0.0 ％ ）
中世史	9	（ 26.5 ％ ）
近世史	3	（ 8.8 ％ ）
近代史	9	（ 26.5 ％ ）
現代史	8	（ 23.5 ％ ）
［うち戦後史］	4	（ 11.8 ％ ）
複数時代混合	5	（ 14.7 ％ ）
合　　計	34	（ 100.0 ％ ）

（4） 地域別の出題数・出題率

年度・出題数 地域	令和４年度 出題数	（　出題率　）
西欧・北米	6	（ 17.6 ％ ）
東欧・ロシア	3	（ 8.8 ％ ）
東・内陸アジア	10	（ 29.4 ％ ）
南・東南アジア	4	（ 11.8 ％ ）
西アジア・アフリカ	4	（ 11.8 ％ ）
中南米・オセアニア	4	（ 11.8 ％ ）
複数地域に関わる	3	（ 8.8 ％ ）
合　　計	34	（ 100.0 ％ ）

中世（5c～14c）・近世（15c～17c）・近代（18c～19c）・現代（20c～）を判断の目安とする。

第１問　世界史上の学者や知識人

問１　文章中下線部の学問に対応する中国における成果について，適当な文を選択する問題。包括的な内容を踏まえた知識の問題であり，選択肢全てが正文であるなどの工夫が見られる。

問２　文章中の空欄の都市の位置について，正しいものを選択する問題。バタヴィアの場所を問う知識の問題である。二つの知識を関連させて正答にたどり着く。

問３　中国と朝鮮との関係の歴史について，適当な文を選択する問題。事実的知識を問う問題。

問４　文章中の空欄イとウに入る語句について，正しい組合せを選択する問題。資料で読み取った情報を踏まえ知識を基に正答を導き出す，思考の意図を感じる問題である。解答の際には，ウラマーに対する包括的な知識が求められており，結果として資料の活用や包括的な知識を問うという面で優れた問題になっている。

問５　イランにおけるキリスト教の歴史について，適当な文を選択する問題。事実的知識の問題。

問６　イスラーム教徒が人口の多数派を形成するようになった背景となるアッバース朝の出来事について，適当な文を選択する問題。問題文で説明しすぎている分，アッバース朝の事実的知識で正答に至る可能性もあるが，「イスラーム帝国」の概念的理解を問う問題。

問７　資料中の空欄の民族の歴史について，適当な文を選択する問題。資料の読み取りと，２つ

の知識を関連させた問題。

問８　チベット仏教の歴史について，適当な文を選択する問題。事実的知識を問う問題。

問９　研究あ・いが提示された例に当てはまるか当てはまらないかについて，適当な文を選択する問題。思考・判断を問う良問。二つの事例が条件に該当するか否かを，歴史事象の知識を元に考察することで正解に至る。

第２問　歴史上の出来事の当事者の発言や観察者の記録

問１　文章中の空欄に入る国名について，正しい組合せを選択する問題。資料の読み取りと知識を問う問題。資料の空欄前後から容易に答えを導き出せる。資料中の連合国に着目させ，「世界大戦」が第一次か第二次なのかを考察させる問題にすると，より資料を生かした問題となったのではないだろうか。

問２　「スペイン最後の植民地」に含まれる地域について，適当なものを地図中から選択する問題。資料の文脈を踏まえたうえで二つの知識を関連させる問題。命題との組合せにより，地理上の位置づけが持つ歴史的な意味を考察させるなど，地図の使い方において改善の余地があるのではないか。

問３　文章中の空欄国の歴史について，適当な文を選択する問題。二つの知識を関連させた問題。

問４　資料中で述べられている交渉相手の首相の国と締結した条約の内容について，正しい組合せを選択する問題。リード文及び資料の読み取りと知識を組合せてPTBTの包括的な知識を問うている。イギリス，フランスと特定する根拠を問うなどの工夫で，思考を問う問題に昇華できたのではないだろうか。

問５　ソ連の歴史について，適当な文を選択する問題。事実的知識を問う問題。

第３問　世界史上の交流や社会の変化

問１　文中の空欄の時期に起こった出来事について，適当な文を選択する問題。２つの知識を関連させた問題。

問２　文章中の空欄の人物について述べた文と，その人物が主導した民族運動を鎮圧した国について，正しい組合せを選択する問題。資料の読み取りと知識を問う問題。

問３　文章中の空欄ウに入る条約名と，空欄エに入れる語句について，正しい組合せを選択する問題。冊封体制を含めたより大きな視点から出題することで，日本を中心に時代を読み解く概念を問う問題とすることも出来たと思われるが，二つの事象の関係性に着目させることで日朝修好条規についての包括的な知識を問うている点で，評価できる。

問４　各地域の人口の動きの説明について，適当な文を選択する問題。①②を正文としたり，産業革命など時代の特質を視野に入れた概念的知識を扱う問題とするなど改善する余地はあるが，資料から読み取った情報を元に理由を考察する，思考を問う意欲的な問題である。

問５　文章から読み取れる事柄を踏まえ，日本と東南アジアとの関係の歴史について，正しい組合せを選択する問題。読み取りと知識を合算するのでなく，読み取った情報を歴史の知識を元に解釈するなど，思考を問うための工夫が求められるが，文章だけでなく表から読み取れる情報と関連する知識を問う意欲的な問題である。

問６　文章中の空欄に入る適当な語について，正しい組合せを選択する問題。二つの知識の組合せを問う問題。

問７　生徒がまとめたメモの正誤について，適当な文を選択する問題。読み取りの技術を問う問題。文章から読み取った情報を，事実的知識を踏まえてまとめているが，生徒が考察するプロセスを加え，その部分で正誤の判断が行われる思考の問題とすることが望ましい。

問８　オセアニアの歴史について，適当な文を選択する問題。事実的知識を問う問題。

第４問　歴史評価の多様性

問１　資料中の下線部の出来事について，適当な文を選択する問題。スペイン内戦の年代把握で解ける部分もあるが，1930年代前半の時代性を包括的に理解しようとする意図を感じる問題。

問２　資料中で表現されている組織と，資料中下線部に関連した出来事について，正しい組合せを選択する問題。知識を問う問題。直接関連性のない二つの異なる事象を一つの選択肢の中に組合せるのではなく，相互に関連しあう二事項を結び付けることで問題の質が向上する。

問３　文中下線部について議論する場合，異なる見方あ・いと，それぞれの根拠として適当な文について，正しい組合せを選択する問題。概念化された知識を元に，歴史の解釈に対する根拠を考察する問題であり，やや難易度は高いが，思考を問う良問である。

問４　文中空欄の人物の治世にロシアで起こった出来事について，適当な文を選択する問題。二つの知識を関連させた問題。

問５　文中空欄の人物が徴税のために始めた政策と世界史上の税制の歴史に関する文の組合せについて，正しい組合せを選択する問題。二つの事象の関連性を高めることで税制度についての概念的知識を問う問題に昇華できた可能性はあるが，賦役黄冊についての包括的な知識が問われた良問である。

問６　文中下線部の要因に関して推測される仮説について，適当な文を選択する問題。年代知識の問題とならないよう誤答選択肢の質を高めたり，仮説と検証を一体化させて問うなど，さらなる改善の余地はあるが，史実の知識を根拠として推論を立て，その妥当性を問うことで論理的な思考力等を問う良問となっている。

第５問　世界史上の墓や廟

問１　文中空欄の人物の事績について，適当な文を選択する問題。二つの知識を関連させた問題。

問２　文中空欄に入れる人物について，正しい組合せを選択する問題。誤答選択肢の質に改善の余地はあるが，リード文と図を組合せて読み解くことで正解に至る，読み解きと知識の問題。

問３　文中下線部の王の治世に起こった出来事について，適当な文を選択する問題。事実的知識を問う問題。問われている時期の幅を広げて時代性を問おうとする工夫が見られる。

問４　移民の歴史について，適当な文を選択する問題。事実的知識を問う問題。選択肢全てを正文として帰納法的に移民という概念を導き出したり，移民と異なる事象を選択肢に入れて移民についての理解を問うなどの工夫で，移民の概念的理解や思考を問う問題に昇華させることが出来たのではないだろうか。

問５　文章中の空欄の地域の位置について，適当なものを選択する問題。二つの知識を関連させた問題。新疆の場所を地図から選択するにとどまらず，新疆の歴史的変遷や地理的役割を問うことで，よりよい問題とすることが出来たのではないだろうか。

問６　文章中の空欄に入る語と文について，正しい組合せを選択する問題。時代の知識で解答する問題になってしまった可能性はあるが，二つの空欄の関連も強く，明の経済社会が持つ特質がどのような影響を与えたのかを視野に入れた，包括的な知識を問う問題。

３　分　量・程　度

分量に関しては，試験時間に見合った適切なものである。難易度は，知識の有無を問う問題や読み取りの問題及び両者を問題が多かった分，やや低めであった。

その中でも，思考を問う問題や知識の質を高めて概念的知識を問おうという意図が感じられる出題が見られた。 9 は，歴史事象に関わる研究が問題で提示された条件に該当するか否かを問う問題であり，論理的思考力が問われる良問である。 25 は，異なる見解に対してそれぞれの根拠とな

る歴史事象を選択する，非常に意欲的な問題であった。世界史の授業においては，思考力・判断力・表現力等を伸ばすために，ある課題に対する自らの見解を根拠を明らかにして説明することが有効な手段の一つとして考えられる。これらの活動で育成された力を評価する問題として，仮説や見解に対する根拠を論理整合性に基づいて選択する問題は適していると考えられる。また，論理的思考と同時にファッショ体制・ナチズム・大政翼賛体制の共通点と相違点を踏まえた，ファシズムの概念的理解も求められており，教科書記述の批判的検証も求められている。解釈が多様な概念用語に対し，資料の読み取りや知識を基に，ある解釈の根拠を問う問題は，論理整合性を評価する問題であり，世界史における論理的思考を問う問題の一つの結論たりうるのではないだろうか。今後ともこのような意欲的な問題の出題をお願いしたい。

28 は，ある事象の原因として推測される仮説を立てる問題だが，新指導要領を考えた際に，非常に重要な問題であると考える。歴史総合や世界史探究では生徒が問いを立て，問いに対する仮説を立て，資料を元に仮説を検証する形での学びが想定されている。歴史の知識を元に仮説の妥当性をはかる問題は，論理的思考力を評価できる問題であり，これから是非増加させていって欲しい。

知識を問う問題においても，問われる知識の質を高めようという努力が見られた。27 で，は賦役黄冊という用語の名称だけでなく，賦役黄冊が持つ役割までを含めた包括的知識が，34 では，明代の経済の特質を与えた影響までを含めた包括的知識がそれぞれ問われた。6 では「イスラーム帝国」，前述の 25 では「ファシズム」，32 では「移民」という概念がそれぞれ問われている。事件や人物などの事実的知識は，大きな歴史的文脈の中に位置づけられてはじめて様々な意味を持つ。知識を問う問題においても，詳細すぎる知識よりも一つメタな次元で概念化された知識を問うことで，問われる知識の質を向上させられるのではないだろうか。出題の際には，概念化された知識そのものを問うと事実的知識を問う問題と変わらなくなってしまうので，具体的事象を集めて帰納法的に概念に至るような形で出題するなど，工夫の余地があるように思われる。

4　表　現・形　式

全ての中問単位で資料や会話文等が設定され，資料やリード文を読むことを前提に作題されていた。小問単位で追加の資料が付けられているものもあり，資料を活用した作問という意図を強く感じるものになっていた。一方で，魅力的な資料を用いながらも，資料中からキーワードを拾うような単純な読み取りでとどまってしまったり，図像資料が解答の際に十分に利用されなかったりという問題も散見された。また，地図問題については，場所の知識を問う問題になってしまっており，移動や変化，場所の持つ歴史的意義などより包括的な知識を問うことが出来る可能性を生かし切れていなかった。図像を含めた複数の資料との組合せや，命題との組合せにより，地理的要件が持つ歴史的意義を問うことなどで，魅力的な資料をより効果的に活用できると考えられる。

第３問，第４問Ｂ，第５問Ｂでは，資料を元に行われている授業の場面が想定されている。これは，これからの歴史の授業の方向性を示すもので，好意的に評価できる。新指導要領を見据え，生徒が問いを表現する場面や，問いに対して仮説を立てる場面など，授業中の活動で生徒が何を考えどう行動するのか，という視点からの出題をぜひとも試みて欲しい。

5　ま　　と　　め（総括的な評価）

本試験「世界史Ｂ」では，いくつかの小問でリード文や資料との関連性が低い問題が見られたが，全体としてリード文を含めた資料に基づき出題しようという意図が見られた。リード文や資料との関連性については，小問で問う内容相互の連関性を高めるなどの工夫によって，大問や中問のテーマに沿ったまとまりのある出題にすることが出来るのではないだろうか。受験者の関心を引き付け

る魅力的な資料が設定されているが，資料の読み取りと知識の組合せにとどまった問題が依然として多い。一部の問題で見られたように，読み取った情報に対し受験者が既知の知識で意味づけをすることで，インプットした情報を変容させてアウトプットする出題がより増加することを期待する。

知識を問う出題は依然多いが，前述のように問う知識の質を高めようという意欲が見られた。概念的知識が問われるためには，史実の用語―歴史分析概念―素朴概念・一般概念のように，世界史の授業で扱われる用語の構造化が必要なのではないだろうか。新指導要領では概念によって時代の転換点を読み解くことが求められる。歴史の授業において事実的知識と概念的知識の往還や，大きな視点で歴史を捉えることが可能となるように，今後も概念的知識の出題に積極的に取組んでいただきたい。

今回の問題では，論理整合性を評価する思考の問題が出題された。受験者の思考力等を評価する際には，類比・対比・因果の視点によって複数の事象を比較し共通点や相違点などを見つけ出す問題の他，ある論に対してそれが論理的に妥当か否かを歴史の知識を元に判断する問題や，ある事象に対して仮説を立てて推論する問題などが考えられる。後者二つにおいては，論理整合性が問われることになる。これまでのセンター試験や共通テストでは，客観性を担保するために事実立脚性に重きが置かれていたように思われるが，これからは事実立脚性と同様に論理整合性が評価の柱になっていいのではないだろうか。28 の問題は，難易度はさほど高くない中で論理整合性が問われていることに大きな意味がある。「思考を問う問題は発展問題であり難易度が高い」という誤解を取り除き，事実立脚性と論理整合性が同じレベルの指標であることを示唆しており，今後の可能性を感じさせてくれた。

なお，今回の評価・分析委員会では，知識のみ，または情報の読取り，またはその両方のみを必要とする設問を「知識・技能」と分類し，考察，構想，説明・議論する力などを問うている設問を「思考・判断・表現」と分類した。

歴史教育をめぐる大きな変化の中，問題作成に当たり，ご尽力いただいた委員の皆様に感謝申し上げたい。